

絵葉書から見る富士吉田口登山道の変遷および景観認識構造
 三部早紀〔東京農業大学 風景計画学研究室〕

【キーワード】富士山、登山道、構成資産

富士山世界文化遺産・構成資産『吉田口登山道』は、北口本宮富士浅間神社から富士頂上まで続く登山道である。14世紀後半には参詣の道者のための宿坊が出来始め、18世紀以降は富士講信者の登山本道と定められた。

富士吉田市教育委員会が発行した図録からは明治以降の神社・仏閣のようすが読み取れる。しかし登録の際、富士山・吉田口登山道の五合目以下に存在していた廃屋となった山小屋や茶屋などの一部が撤去された。その後、明治以降から現在まで絵葉書から見た吉田口登山道の変遷は研究されていない。

そこで本研究では、吉田口登山道を対象に絵葉書を用いて、吉田口登山道の景観の変遷を明らかにすることを目的とする。

また、本研究では時代の違う吉田口登山道の景観を比べて、景観構成要素から人びとが受けるイメージを明らかにする。

方法としては絵葉書や地図から吉田口登山道の景観の変遷を調査と評価グリッド法によるパーソナルインタビュー調査を行う。評価グリッド法では、比較対照物を用意し、それらを比較してもらい、その意識の理由を聞き出す。

そこから「なにを知覚するか」その知覚から「どのような理解をして」そこに「どのような価値を見出しているのか」という人びとの持つ吉田口登山道への認識構造を明らかにする。

農家民宿経営開始前後における地域住民の意識の変化について
 —世界農業遺産「能登の里山里海」の輪島市三井町を対象に—

土門 優花〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 観光レクリエーション研究室〕、
 ○栗田 和弥〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科〕

世界農業遺産の登録地域「能登の里山里海」において新たな農業・農村システムが模索されており、グリーン・ツーリズムの一形態として農家民宿が発達してきている。能登町においては「春蘭の里」と称される農家民宿群を筆頭に経営がなされており、輪島市（三井町地域）においても、2016年度に1軒が立ち上げられた。そこで本研究では、試験的に農家民宿を体験してもらい、農家（地域住民の一部）の民泊前後での意識の変化を調査し、農家民宿を運営していくにあたって地域住民（農家民宿を体験あるいは経営を考えていない住民）への負担や今後の展開の可能性について検討する。研究方法としては、これから農家民宿の経営を検討している農家5軒、その周辺の地域住民、そして民泊体験者を対象にそれぞれアンケートあるいはヒアリングを行った。周辺住民に行った事前調査では農家民宿についての認知度は高いということが判明した。しかし一方で、実際に経営することについては否定的な意見も多いことが分かった。これは、元々観光地ではないことから、他人が地域の中に入り込むことに対する抵抗があることが考えられた。また、民泊体験者からの調査から、実際に経営を始めるにあたっての意見をまとめた。